

---

# 幻夜華

LEIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻夜華

### 【Zコード】

N1397E

### 【作者名】

LEHN

### 【あらすじ】

荒くれ者の父に育てられた松助と梅吉。父が死に、松助と梅吉は顔も知らぬ母親の下へと向かう。美しい母親の出現に、二人の兄弟はとまどいが…。

## まえがき

小説の

神といつものがおられたのならば

できるだけ忠実に

忠実に書いてこいつ

誰の為にでもなく

正義の為にでもなく

悪を助ける為にでもなく

義憤の為にでもなく

しがらみと欲得の為にでもなく

只々

神の現われとしての絵画が存在する

この短い小説もやつあるべきである

## あの時が呼んでいた

僕はその時、まだ10歳だった。

親父はいつも呑んだくれていた。

畳みに座り、勢いのよく「バーン！」と手を叩き付けた先には、30代前半の鋭い眼光の細目男が皆を睨む。その手に握られたものから賽が一つのぞくと、親父は「畜生め！！！」と胡坐の膝を叩いた。

僕は隙間を開けた障子をバタンと閉めると、溜息をついた。

今日も親父は荒れるだらう。

なんで博打なんてもんがこの世にあるんや！

博打さえなれば、こんな明日の飯もわからぬ生活をせんと済んだの。

誰が考えたんや。

どうして生きるて事には、こんな罠があるんや。

親父を憎いながらも憎みきれない。

その頃の僕は幼いながらに、「不条理」つてものを知つてしまつていた。

親父は女もよく連れてきた。

僕がまだ外で棒切れを持って遊んでいたのだろう。

荒い息遣いが聞こえると、そこには着物の裾から艶めかしく白い脚をのぞかせた女がいる。

僕は驚き、急いで逃げ出した。

川に座り、僕は汚いランニングに短パンで、文字を書いていた。

「バカヤロウ、バカヤロウ」

何度も書いては消し、書いては消した。

ふと、何かを感じて川を眺めると、川に何か太陽の反射のような白く眩しいものが光った。

しばらく見つめていると、それはまた光った。

太陽の反射にしては眩しかった気がした。

それを見ているうちに、僕の胸の中の暗い気持ちがスースと白くなつた。

不思議だと思いながらも、子供はそんな事を長く意に介さないものだ。

毎日、親父に殴られ、酒瓶が飛んで来ようとも、今の僕よりずっと遙しかつたとすら思う。

その分、喧嘩で発散していたのだから。

自慢じやないが腕っぷしは強かつた。

誰にも負ける気がしなかつた。

さすがに僕より頭一つ以上、背の高い年長の者が3人がかりで大きな石を持って殴りかかってきた時には参った。

僕はあばら小屋まで駆けていった。三人は後ろから疾風のように追つてくる。

あばら屋を背にする僕、ひょろ細い奴が一ヤリと笑った。

ケツ、畜生め。

さあ、誰が最初に襲いかかるか、奴らは互いに気配を計っていた。

一番小さいのが、うわあ、と叫びながら襲いかかってきた。

奴の握り締めた石が頭に降りかかる。

わあ、びっくり。

このままじゃ頭が力チ割られてしまう。

おののきながらも怖気づいたら負けだ。

僕は瞬間、サッと身を屈めた。

見上げると奴の手はバリバリと音を立てて、あざら壁にめり込んでいた。

木のギザギザが腕に刺さっているのだろう。

「ギヤアアアア」と悲鳴が頭上から聞こえ、真っ赤な血が、ぽたぽたとしたたつている。

そいつの腕を余計に木にめり込ませてやる。

「うわああ

僕の目は鋭い土佐犬のように、狂ったようにこの一つの腹に突進していく。

「た、頼むから、勘弁してくれ…」

とつとうそこつは観念した。

あとの二人は、呆然としながらその場に立ち尽くしていた。

「」、「こつは基地外や」

石を捨てて、哀れな友も見捨てて、後ずさりしながら、逃げていく。

「なんて奴らや」

氣を失つて、壁にひつかつていてる「そいつ」を、木の芽に逆らわ  
ないようになつと外すと、地面にそつとおいた。

憐れみにも似た、おかしな感情が僕の心の底から湧いてきた。

今は争つたが、こいつも俺と同じ、惨めな人間なのだ。

あばら屋の反対側ならば、誰かが気がつくだろう。

反対側まで、そいつを下に落っこち、そつと置いていった。

## 父の死

しばらく経つた頃、あいつをみかけた。

腕をぐるぐるに縛っている。

あいつは怯えた顔をしながら、今にも逃げ出しそうに身を縮こまらせている。

僕が思い切り睨みつけると、そいつは「いや」と逃げるよつに道を折れて行つた。

あの頃は怖いものなんてなかつた。

ただ、奇妙な「この世」というものが僕の前で混沌として広がつていた。

あちこちで人が死んでいた。死にゆく者は惨めに死んでゆく。

貧困の為、火の不始末の為、病の為。

そして僕の目の前で妖しく繰り広げられていく性の世界。

戸惑い、困惑しながらも、それが本当に意味するものを僕はまだ本

当に理解できていなかつた。

あの時までは。

僕を殴り続けた親父が、あの日、じろりと死んでしまつた。

酒瓶が右手の先に広がり、目をかつと見開いていた。

目は充血し、どこを見ているのかわからないが、天井を剥いている。

僕は障子に寄りかかつたまま、座り込んだ。

手がガクガクと震える感覚を、産まれて初めて感じた。

親父の葬式は親戚がやつてくれた。

と、いつかその時まで僕は、自分に親戚がいる事すら知らなかつた。

僕は何が何だかわからないままに親父の死を迎えてしまつた。

正直、悲しいのかもわからなかつた。

死の現実味というものがまったくわからなかつた。

本当は泣かなければならぬのだと、幼心にもわかつてはいたのだけれども。

代わりに思い切り睨みつけて、灰を顔に投げつけてやった。

## 上品ぶつた「珍かしい奴ども

「まあ、なんて子や」細面の上品な化粧をした50近くの女が言つ。「末恐ろしいおますな」

「「じどりやから、何がなんだかわからんと、投げつけたんや」」  
「しかし」一人の中では上品そうな顔をした男が腕を組む。

「この界隈では手のつけられん暴れん坊やといつやないか。」

「兄貴の方はそら大人しいもんやけどな」

「兄貴はいくつや?」

「16や、確か」

「とにかくこの子らをなんとかしてあげないといかんのと違う?」  
「そやけど、うちも手いっぱいやしなあ」

貸本を読んでいるふりをしていても、話し声は嫌でも耳に入つてくる。

本当に無神経な奴らだ。

子供だからわからないと思い込んでいるんだ。  
でも、大人が思うほど物知らずなわけがない。  
のほほんと生きてきた、あんた達よりはよほど僕の方が物がわかる人間や。

自分とは縁の遠い、綺麗な着物を着て話し合っている奴らの方が、  
僕らよりもよほど汚い神経の持ち主なんや。

話はあっちの家、こっちの家に飛び、お互いが誰かに押し付けようとしていた。

どうか。親を失った子供は「お荷物」でしかないんや。

僕はその事実をはじめて感じ、心がズタズタに裂けるような衝撃を受けたのを覚えていい。

僕は外に出た。

家からじょじょに離れたところまできて、やつと我慢していたものを、ひっくひっくとしゃくりをあげた。それでも絶対に涙は流さないようになした。

「どうしたん？」

サチ子という9歳の女の子が声をかけてきた。

「なんでもない。ちかよらんといで」

「なんでもないって嘘や。」

サチは僕の背中をさすった。

「な、川辺まで連れてって」

「しゃあないな。一人でいけるのやろ

「さうや。うち方向音痴やけえ」

どうか「泣く」とこゝはめにならると心も落ち着いてきた。

サチと僕は川辺に座って、流れる水を眺めていた。

「 なあ 」

「 うふ? 」

「 どつが遠くに引っ越しすん? 」

「 なんですか 」

「 うかのお母ちゃんがそつこつとたから。誰か親戚の所に貢われて行くんやうなつて…。 」

僕は立ち上がりて小石を川に投げ入れた。小石はぽんぽんぽんと、三段跳びで跳ねていく。

「 どつせ孤児院にでも送るんやろ。 」

「 なんだ? 」

「 別にええねん。あいつ等は俺らがきてほしくないねん。 」

「 そんなんやつたら、親戚なんかいらんな 」

「 ええねん。俺は誰もいなくても生きていけるねん。 」

「 う 」飯はどうするん? 」

「生えてる草あるやんか。あれを食べたら生きていけるやん。」

「それもやうやな

サチの目が楽しそうに輝いた。

実際は草だけじゃ生きていけないのだけれど、その頃はそんな事は知らなかつた。

ただ、これだけは確信があつた。

僕はどうせやつたって生きていける。

必ず生き抜いて生きるんだ、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1397e/>

---

幻夜華

2010年10月8日23時49分発行